



旅への思い

芭蕉と『おくのほそ道』

「旅」といえば、皆さんはどんなことを思い浮かべますか。娯楽としての旅を日本人が楽しむようになったのは、江戸時代の初めのことです。長い戦乱の時代が終わり、人々の生活が安定したことがその背景にありました。

江戸時代の俳人、芭蕉は、元禄二（一六八九）年の春、江戸の深川を出発し、東北・北陸地方への旅に出ました。人生の大半を旅に過ごした李白や杜甫、西行や宗祇などの詩人たちのことを思いながら、漂泊の旅に出たのです。この体験を『おくのほそ道』という紀行文にまとめました。

『おくのほそ道』の記述は、大垣に着いて次の旅へ出発する場面で結びとなります。芭蕉は、その後も近畿地方を巡り続け、江戸に戻ったのは二年後のことでした。旅の体験を文章にまとめ始めたのは、出発から三年もたつてからだといわれています。つまり、『おくのほそ道』は、日記のかたちで書かれたものではなく、長い月日をかけてまとめあげられた文章なので

目標

- 歴史的背景に注意しながら音読し、文章の特徴を理解する。
- 句にこめられた作者の心情や情景について話し合ったり、古典の一節を引用した文章を書いたりする。

芭蕉 一六四四—一六九四 江戸時代前期の俳人。伊賀・国上野（現在の三重県伊賀市）に生まれた。本名は、松尾宗房。俳人、藤堂良忠に仕えて俳諧に親しみ、後に江戸に出て芸術性豊かな独自の俳風（蕉風）をなした。「松尾芭蕉」は、後世の呼び名。

▼ 娯 『出典』『新編日本古典文学全集71 松尾芭蕉集②』によった。





「奥の細道図屏風」(与謝蕪村)



蕉風発祥の地 (愛知県名古屋市長古屋市)

す。

芭蕉はその後にも推敲すいこうを続け、清書された『おくのほそ道』を持って元禄七(一六九四)年に
関西方面への旅に出ましたが、その途中、次の句をよんで、大坂で亡なくなりました。

旅に病んで夢は枯野かれのをかけめぐる

芭蕉が長い間抱き続けた旅への思いは、どのようなものだったのでしょうか。旅立つ前の思
いを記した、『おくのほそ道』の冒頭の部分を読んでみましょう。

5

(118ページ)

おくのほそ道 日本の
紀行文学を代表する作品
の一つ。行程約二千四百
キロメートル、旧暦の三
月二十七日から八月二十
一日まで(現在の暦では
五月十六日から十月四日
まで)の、五か月近くに
わたる旅を題材として書
かれている。

江戸の深川 現在の東
京都江東区ことうのあたり。

李白 P 136参照。

杜甫 P 138参照。

西行 P 133参照。

宗祇 室町時代後期の
連歌師。

▼漂

大垣 現在の岐阜県大
垣市。

▼畿

▼冒

(120ページ)

▼慨

おくのほそ道旅程図

三月二十七日 江戸

四月一日 日光



あらたふと青葉若葉の日の光
 (ウ) なんと尊く感じられることか。青葉・若葉に降り注ぐ日の光が。

*日付は旧暦。

四月二十日 那須



田一枚植ゑて立ち去る柳かな
 (エ) 西行の立ち寄った柳を感慨深く見ている間に田植えの人は去り、自分も立ち去った。

五月四日 仙台



あやめ草足に結ばん草鞋の緒
 (オ) (ワ) 旅先での端午の節句に、菖蒲の葉を草鞋の鼻緒に結んで、旅を続けようと思う。

五月末 大石田



五月雨をあつめて早し最上川
 (カ) (キ) おりからの五月雨をたくさん集めて、最上川は勢いよく流れている。



六月十四日 酒田

暑き日を海に入れたり最上川

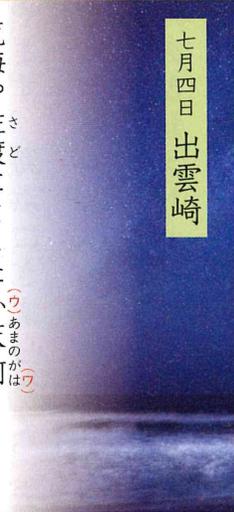
暑い一日も、最上川が海に流し入れてしまつたようだ。



七月四日 出雲崎

荒海や佐渡さどによこたふあまのがは天河あまのがは

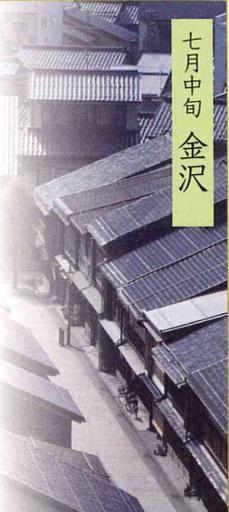
荒海の向こうにある佐渡島へかけて天河（天の川）が大きく横たわっている。



七月中旬 金沢

あかあかと日はつれなくも秋の風

赤々と照りつける残暑の日が暑い、風は秋らしく感じられる。



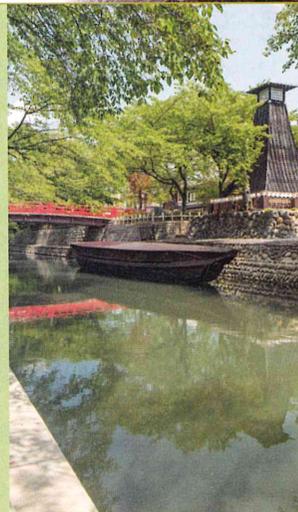
八月五日 小松

石山の石より白し秋の風

吹き過ぎる秋風が、那谷寺なたがきの白くさらされた石よりも白い感じがする。



八月下旬〜九月 大垣



『奥の細道行脚之図』より
芭蕉（左）と門人の曾良（右）

おくのほそ道

芭蕉

旅立ち

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。

舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、
日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。

予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思
ひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋、江上の破屋に

くもの古巢を払ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に、
白河の関越えむと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、
道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず。

ももひきの破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸
すゆるより、松島の月まづ心にかかりて、住める方は人に
譲りて、杉風が別墅に移るに、

10

5

月日は永遠の旅人であり、行く年来る年もまた旅人である。舟の上で一を送る船頭や、馬のくつわを取って老いを迎える馬子は、毎日の生活が旅であり、旅をすみかとしている。昔の人にも数多く旅の途上で亡くなったかたがいる。

私もいつの頃からか、ちぎれ雲が風に誘われて空を流れていくように、あてのない旅に出たいという思いがやまず、海辺の地方をさまよい歩き、去年の秋、隅田川のほとりのあばら家に戻り、くもの古い巢を払って住んでいるうちに、やがて年も暮れ、立春になって霞が立ちこめる空を見ていると、白河の関を越えていきたいものだと、人をそわそわさせる神が取りついて私の心を迷わせ、道祖神が招いているような気がして取るものも手につかない。

ももひきの破れを繕い、笠のひもを付け替えて、三里に灸をすえると、松島の月はどうなだろうとまず気にかかって、今まで住んでいた家は人に譲り、杉風の別荘に移るにあたって、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家
とよんで、これを発句として表八句を懐紙に書き記して、庵の柱に掛けておいた。





「名所江戸百景 大はしあたけの夕立」
うたがわひろしげ
 (歌川広重 芭蕉の住んでいた深川に
 あった橋を描いたもの)



「江戸名所図会 芭蕉庵」
はせがわぜったん
 (長谷川雪旦)

安時代に栄えた奥州藤原氏の館の跡を訪ねます。

それから二人は、日光、那須、白河の関、仙台、松島などを巡っていきます。そのうちに、季節は春から夏へと移り変わっていきました。

石巻を訪ねてからは進路を内陸部へと改め、五月十三日には平泉に着きました。そして、平

このようにして、これまで住んでいた深川の草庵を人に譲ったのち、三月二十七日に、門人の曾良を連れて、芭蕉は江戸を出発しました。その旅立ちの句は次のようなものでした。

行く春や鳥啼き魚の目は泪

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家
 おもて
 表八句を庵の柱にかけおく。

(122ページ)

船頭 船をこぐことを

職業とする人。

馬子 人や荷物を馬に

のせて運ぶことを職業と

する人。

道祖神 旅人を守る神。

三里 膝頭の下の外側

にあるくぼみ。ここに灸

をすえると足が強くなる

という。

杉風 古くからの芭蕉

の門人。

発句 俳諧の第一句で、

五・七・五の十七音から

なる句。

表八句 百韻(百句形

式の連句)は四枚の懐紙

に書く。その一枚の表

に書く八句。

▼ 譲 払

平泉 ひら いづみ

三代の栄耀 えいよう 一睡 いすい のうちにして、大門 だいもん の跡は一里 いちり こなたにあり。秀衡 ひでひら が跡は田野 てんや になりて、金鷄山 きんけいざん のみ形を残す。

まづ高館 たかだち に登れば、北上川 きたかみがは 南部 なんぶ より流るる大河なり。衣川 ころもがは は和泉 いづみ が城 じやう を巡りて、高館 もと の下にて大河に落ち入る。泰衡 やすひら らが旧跡 きうせき は、衣 ころも が関 せき を隔 へだ てて南部 ぐち 口をさし固め、夷 えい を防ぐとみえたり。さても義臣 ぎしん すぐつてこの城に籠もり、功名一時のくさむらとなる。

「国破れて山河 さんか あり、城春にして草青みたり。」
と、笠打ち敷きて、時の移るまで涙を落としはべりぬ。

夏草 なつくさ や兵 つはもの どもが夢の跡

その後二人は、暑さに苦しめられながら険しい山道の旅を続け、尾花沢でしばらく休息します。そこから寄り道をするように立石寺を訪ねたのは、五月二十七日のことでした。

10

5

三代の栄耀 十二世紀、藤原清衡・基衡・秀衡の三代が栄えたこと。秀衡は、源義経を保護した。

大門 藤原氏の政庁のあった平泉館の南大門。金鷄山 秀衡が富士山の形に築かせた山。山頂に黄金の鶏を埋めたと伝わる。

高館 義経の館。

南部 南部地方。平泉の北方。現在の岩手県盛岡市一带。

和泉が城 秀衡の三男、忠衡の館。

泰衡 秀衡の次男。

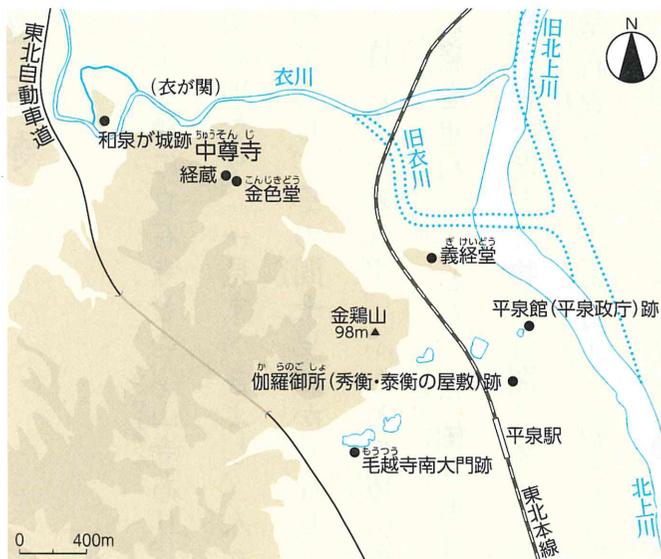
▼ 隔

夷 北方の、中央政権にまだ服従していない人々。義臣 義経に忠義を尽くす家臣。

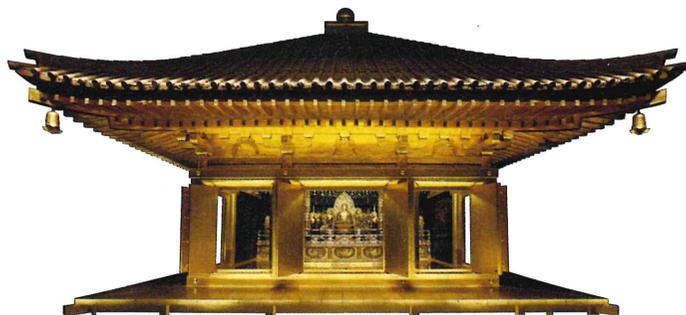
「国破れて……」 唐の詩人、杜甫の詩による。

P 138 参照。





平泉周辺地図



中尊寺金色堂

高館義経堂付近より北上川を望む



(リユウシヤク)
立石寺

山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覚大師の開基にして、ことに清閑の地なり。一見すべきよし、人々の勧むるによつて、尾花沢よりとつて返し、その間七里ばかりなり。

日いまだ暮れず。ふもとの坊に宿借り置きて、山上の堂に登る。岩に巖を重ねて山とし、松柏年旧り、土石老いて苔滑らかに、岩上の院々扉を閉ぢて物の音聞こえず。岸を巡り岩を這ひて仏閣を拝し、佳景寂寞として心澄みゆくのみおぼゆ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

この後芭蕉は、酒田、市振、金沢、敦賀などを経て、八月下旬に大垣へとたどり着き、二週間ほど滞在して次の旅を始めました。芭蕉は、次の句でこの紀行文を締めくくっています。

蛤のふたみに別れ行く秋ぞ

立石寺



立石寺 現在の山形県山形市にある寺。

慈覚大師 七九四—八六四 平安時代初期の僧。円仁。

開基 仏寺を創立すること。

▼ 勧

坊 参詣者を泊める宿坊。

松柏 松や檜の類。

岸 崖のふち。水辺に限らず用いる。

▼ 佳

寂寞 ひっそりとしたもの寂しい様子。

▼ 滞



千 みちしるべ

内容を捉えよう

- 1 歴史的仮名遣いに注意して、音読しよう。

読み深めよう

- 2 「旅立ち」から、芭蕉が「旅」に対して抱いていた気持ちがわかる部分をあげよう。
- 3 「平泉」や「立石寺」の情景や、芭蕉が感じ取ったものを文章から読み取り、芭蕉の心情を想像しよう。
- 4 印象に残った句を引用し、描かれた内容を紹介する文章を書こう。

自分の考えを伝え合おう

例 夏草や兵どもが夢の跡

藤原氏や義経をしのぶものは、今は何も無い。高館には夏草が青々と茂っているだけ。そんな夏草に、芭蕉は生命力を感じ、滅んだ者たちのことがいつそう哀れに思われたのではないだろうか。

振り返り

- 歴史的背景を踏まえ、「旅立ち」「平泉」「立石寺」のそれぞれに表れている作者の心情を読み取っているか。
- 印象に残った句から想像したことを文章にまとめているか。

この教材で学ぶ漢字

118 漂 ヒョウ ただよう 漂い歩く	118 娛 ゴ 娯楽	120 慨 ガイ 憤慨	126 勸 カン すすめる お勧め
118 織 キ 織内	122 讓 ジョウ ゆずる 席を譲る	122 弘 ハラウ 売り払う	126 佳 カ 佳境
119 冒 ボウ おかす 危険を冒す	124 隔 カク へだてる 距離が隔たる	126 滞 タイ とどまる 交通が滞る	

新出音訓
122 過客★
(カク)